



『54年ぶり2回目の花園』

前浦和高校監督

小林 剛 (草加高校)

埼玉県ラグビーフットボール協会75周年、おめでとうございます。

浦和高校に赴任して13年目の事でした。6年目からは8年連続関東大会に出場。花園予選決勝は8年目に経験。その年から、5年続けて横田先生率いる深谷高校の前に跳ね返される日々。12年目は新人戦、関東予選、花園予選とすべての大会で決勝進出も、優勝には届かず。13年目に、新人戦、関東予選、共に準優勝。昨年度から5大会続けて決勝で深谷高校に負け続け、花園予選でようやく勝利。昭和34年(1959年)以来、花園出場に、部員・保護者・学校関係者・OBなど多くの浦和高校ラグビー部を応援してくれる方やラグビー関係者に喜んでもらえました。全国大会も多くの方に大阪まで足を運んでもらい、第一グラウンドで1万3000人を超える観客の前で試合をすることが出来ました(前回は西宮開催の為、花園のグラウンドには初登場)。試合は負けてしまいましたが、浦和高校として大きな1歩を踏み出すことが出来たと思います。

一見、順風満帆に見えますが、1年目は前任者の宮本先生から新人戦ベスト4のチームを引き継ぎましたが、花園予選ではベスト8がやっと。川口北高校の北尾先生、浦和工業に異動された宮本先生に指導を仰ぎ、指導者としては、素人同然(その頃の部員には申し訳ありませんが…)の私を育てていただきました。そして、学校関係者の尽力もあり、5年目には海外遠征の機会に恵まれます(次の年から浦和高校、関東大会に出場)。また、7年目にはAシードで参加した花園予選で私が高校で初めてラグビーを教わった川越高校の坂下先生に負け、厳しい指導をいただきました(次の年に浦和高校、初の決勝に進出)。そして、13年目、指導者の言う通りにやる事の精度を上げる指導

から、選手に考えさせる指導に変えた事(ATです。DFはゴリゴリの規律!)が実を結び、優勝。

また、私の浦和高校在籍17年間を振り返ると、多くの出会いに恵まれたと思います。赴任当初から浦和高校創部当時のメンバーとして物心両面でお世話になった栗原義正先輩(花園に出る年の2013年4月に鬼籍に)。赴任時の3年生であった島川大輝は、花園出場を果たす12年目まで、足繁くグラウンドに足を運び、現役生徒の指導を買って出てくれました。OB会では多くの方にお世話になりましたが、幹事長の志田明先輩には、長きにわたり、顧問を始め、多くの現役・OBがお世話になりました。私の在籍期間、一緒に顧問をしていただいた先生方、学校関係者・保護者のご理解とご協力が無ければ、このような結果は得られなかったと思います。そして、ラグビー部事故受傷者を支える会について。優勝した決勝戦で、次の年の練習試合において、2年続けて重傷事故が発生しました。ラグビーに怪我は…と言いますが、重傷事故を起こさない、また、起きた場合、受傷者を支えていく体制が大切だと思います。支える会へのご支援・ご協力をお願いします。

全国でも有数の競技人口を誇る埼玉県。埼玉県のラグビー関係者(特に高校ラグビーに係る先生方)に指導者も、選手も育てられました。そんな埼玉県でラグビーを始め、指導できる立場にあり、ラグビーに関われることに感謝し、これからも、日々、精進していきたいと思っています。

埼玉県ラグビーフットボール協会75周年誌発行にあたり、永年のご尽力に敬意を表し、協会の益々のご発展と皆様のご健勝を祈念申し上げます。



「10年目に悲願なる。昌平ラグビー物語」

昌平高校ラグビー部監督

御代田 誠

はじめに

平成19年11月、昌平高校前校長より「新しい学校を作るからラグビー部の監督として一緒にやらないか?」と誘いを受けました。当時、私は母校である国学院栃木高校のFWコーチ兼国語科教員として勤務していました。ラグビーの監督をしてみたいという気持ちはあるものの恩師に話しを通さず、自分の進路を勝

手に決めることはできません。思い切って、国学院栃木吉岡先生に相談した所「御代田が監督? いい話じゃあないか、しかし、国柄のコーチ、俺の右腕をもぎとっていくんだから、俺が校長にしっかりあって話してから、決めよう。」と行って下さいました。後日、吉岡先生が昌平前校長と面会し、御代田の昌平高校行きが決まりました。吉岡先生からは「国柄の初の暖簾

だけ。しっかりやれよ。いつか全国大会で戦おう。それまで、情熱を絶やしては行けないぞ。」と激励をいただきました。

はじまりは…

いざ赴任してみると、部員は3人、3年2名、2年1名だけだったのです。私は内心「校長に騙された。」と思いました。3人の部員はろくに練習をしたことがない様子。それどころか、まともなボールは一個もありません。私が赴任する前は、いったいつ練習したのだろう?と思うぐらいの状況でした。ボールは幸い、国柄時代に付き合っていたスポーツ店さんが、「監督就任祝いに。」と3つくれました。これで練習ができると安堵したのを覚えています。1年も18名入部し、部員も20名となり花園予選に単独で出場できるまでになりました。今でもそうですが部員を集めるのに一苦労しました。

初の公式戦

一回戦は細田学園でした。お互い緑色のジャージのため、せめて3年生にファーストジャージを着せたくて、細田学園に電話をいれ「セカンドジャージがないのと、昌平は次戦もないと思うのでファーストジャージを着させてください。」とお願ひしたのを覚えています。選手には「先制点を取られないこと、きっちりディフェンスをすること、そうすれば勝てるチャンスあり。」と助言をしました。試合は助言とは全く反対の方向に働き0-24の完敗でした。反撃のチャンスはいくつもあったが、フィニッシュに至る所で痛恨のミスが出てしまい、悔しい思いをしました。私が赴任して約半年にしては上出来の試合でした。一年生ばかりでしたが、よくディフェンスもしました。これが新生昌平ラグビー部のほろ苦いデビュー戦でした。

花園初出場

平成20年11月18日、昌平高校初優勝。この瞬間に昌平高校ラグビー部OBすべての努力が結実した。

この年の深谷高校との対戦は3度目であった。新人戦決勝(1月)では0-41と完敗。関東大会予選(5月)は試合開始早々に立て続け3本トライを奪われたが、こちらも奮起して23-36と善戦した。この試合により手ごたえを感じた。点差は新人戦より飛躍的に縮まったが、「何が足りないか、何を鍛えるべきか?」を必死に模索した。

平成26年に初めて決勝戦で深谷高校と対戦した時は14-36で負けている。この時はアタックにこだわって練習をしていた。それだけアタックの能力のある選手もいた。しかし、アタックが通用しなくなると深谷には、もう打つ手はなかった。そのことを教訓に、たどり着いた結論は「ディフェンスの強いチームを作る。」こと。「昌平は小さい選手ばかりだ、深谷との体格差を埋めるためには、ダブルタックルを行おう、一人で倒せなければ二人で倒せばよい。ディフェンスに二人分の人数がかかるなら深谷より多く走ればよい。ディフェンス力と走力で勝とう。」と考えに至った。

夏合宿に走り込みと山登りを毎日慣行した。選手たちは疲弊し、けが人も続出したが文句ひとつ言わずについてきた。皆平13日間の合宿で全員が100kmを超える距離を走っていた。そして、ディフェンスコーチにキース・デービスをスタッフに迎え入れ徹底的にディフェンスの整備とダブルタックルにこだわった。そのほか、御所実業高校や春日丘高校に出向き、練習試合をしてもらった。全国の強豪校と戦い、選手たちに自信をつけようと思ったのだ。その甲斐あって決勝戦の日も選手たちはひるむことなく平常心で戦えた。

決勝戦試合開始早々にチャンスはやってきた、こちらのキックを深谷が処理をミスしたのだ。それを足に引っかけ先制トライを奪う、選手たちは勢いづいた。しかし、4連覇を目指す深谷に前半終了間際にトライを許し、7-7で前半を折り返した。後半は両校譲らぬ試合運びのまま、試合の得点は14-17。試合終了間際に、深谷のBK選手がシンピンで一時退場となった。深谷は一人選手が足りない状態である。後半34分昌平高校がボールで保持していた。ミスしたらノーサイドとなる場面で、FWはモールを執拗に組もうとするが体格で上回る深谷に押しつぶされる。我々ベンチは叫んだ「BKに回せ、回せ、テンポをあげろ」と、それに応えるようにBKに展開した。何度もフェーズを重ねボールを繋いだ。

自信はあった。「あれだけ走りこんだのだから、最後の最後で走り負けるわけがない。」それだけ信じて祈った。深谷ディフェンスの一瞬のすきを突いてCTBからオフロードパスがFBに繋がった。チーム一の俊足FBがライン際を駆け抜けた。よくテレビなんかでスローモーションのように映ったと言うけれど、まさにそうだった。信じられないぐらいスローモーションで「早くインゴールにトライしろ」と心の中で叫んでいた。スローモーションが元に戻ったのは、大きな歓声とともにインゴールを駆け抜け、ど真ん中にトライした時であった。夢のような瞬間であった。何が起こったのかわからないというぐらいチーム全員が興奮していた。夢の花園初出場である。

この年の花園では一回戦26-22で八幡工業に勝利し、二回戦では前年度優勝校の東福岡と対戦した。結果は前半7-14と健闘したものの、7-68で大敗し、全国の壁を経験した。

わずか3人から始まったラグビー部が全国大会に出場するまで、私が赴任してちょうど10年の節目の年であった。先人に「何かを成し遂げるためには10年かかる」と教わったことがある。まさにその通りであった。私が強くしたわけではない。この10年間、私の指導に辛抱強くついてきてくれた選手たち、この選手たちの努力のバトンが昌平高校ラグビー部を少しずつ強くしていったのだ。まだ、県予選一回戦も勝てないチームで、花園に行けるわけもない時に、花園行けると信じて戦っていた選手。この選手たちが昌平高校花園初出場のヒーローである。